

部分に変化を起こし、数年～10年後とうとうがんを発生させてしまうのです。

ウイルス感染や細胞の変化を調べるのが、子宮頸がん検診です。現在では、従来行われていた子宮頸部細胞診（子宮頸部の粘膜の表面を柔らかいブラシなどでこすり細胞をとつて調べる方法）のほか、HPV検査を同時に「ウイルス併用検診」が可能です。もちろん費用はかかりますが、併用検診ができる飛躍的に検診精度が上がり、見落としがなくなります。

異形成と呼ばれる細胞変化がなく、かつウイルスがないなければ、間違いなくその女性の頸がんリスクはとても低いことを示します。そのため、次の子宮がん検診は3～5年後でもよいのです。

もし、ウイルス感染や細胞の変化（異形成）に気づかず、子宮頸がんが発生したら残念なことに、子宮を失うことがあります。子宮頸部から壁の壁、周囲のじん帯や尿管などにもがんが浸潤し、「不正出血」「血尿」「腰痛」などの自覚症状が出てからでは、子宮を残すことは困難であり、骨盤の底をえぐるような大きな手術（広汎子宮全摘出手術）をする必要があります。膀胱や直腸の神経も切りりんぱ節もとので、後遺症として排尿や排便の障害、リンパ浮腫が残ります。若くして子宮を失うだけでなく、これらの障害と一緒に付き合わなくてはならなくなるのです。

うとうがんを発生させてしまうのです。

世界では常識のワクチン接種

日本での接種率は1%以下

HPV感染に関わりなく、若いうちに（45歳以下が推奨されています）ワクチンを打つておけば、そもそもウイルスに感染しにくくなりますので、がん検診の頻度がもっと減らせます。海外では「9価ワクチン」というハイリスクのHPV 9種類の感染が防げるワクチンを打つておけば、一生のうち子宮頸がん検診は3回でよいともいわれています。

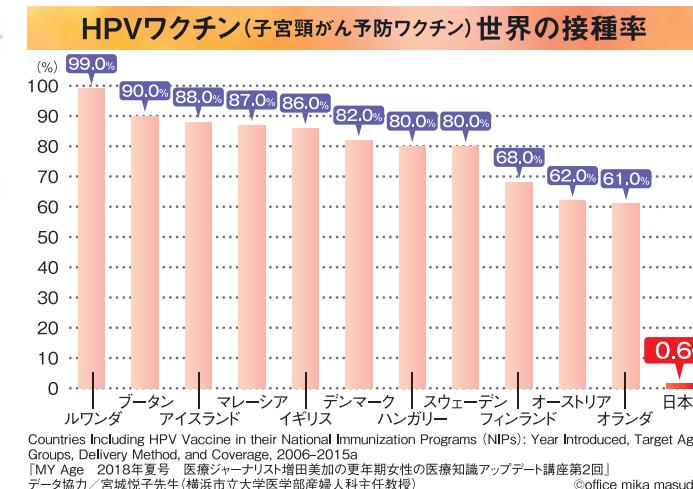
今、世界の国々では10代前半のうちにワクチンを打っています。日本でワクチン副作用のフェイクニュースに踊らされているうちに、世界では8～9割の女子がHPVに対する免疫力を身につけ、かつ50カ国以上では男の子も打ちだしています。HPVに對する免疫力を身につけ、かつ50カ国以上では男の子も打ちだしています。（中咽頭がん、陰茎がん、肛門がんの予防につながる）。近い将来、HPVが原因のがんは世界からなくなるのはと言われるほどになりました。日本では5年前からワクチン行政がとまっており、毎年1万人もの若い女性が子宮を失い、数千人が死亡する事態です。自身の健康のため、家族のため、そしてこれから子どもを産む若い世代のために、今ワクチンのあり方が問われています。

まだ今年度の健診予約をされていない方は早めにお申し込みください
《2019年度 健診期限》
申込期限：2020年2月28日
受診期限：2020年3月31日

健診案内の送付依頼、
健診の予約に関するお問合せ先

(株)LSIメディエンス(委託先)
0120-507-066

平日9時～17時30分
※時間帯によってはお電話のつながりにくい場合があります。予めご了承ください。



ホンダ健康保険組合のホームページでは、「2019年度 健診のご案内」冊子のPDFや冊子発行後に決定した貸切健診日程、こちらのコラム「オナの健活」のバッカナンバーなども掲載しているので、是非ご覧ください。



オンナの健活

Vol.3

別名「マザーキラー」と呼ばれる子宮頸がん検診による早期発見と同時に問われる「予防」の観点

比較的若い世代が発症しやすい子宮頸がん。発症の原因が解明されており、世界的に見れば「将来なくなるがん」とも言われていますが、日本では取り組みが遅れているのが現状です。

このドクターに聞きました



対馬ルリ子女性ライフクリニック銀座 理事長

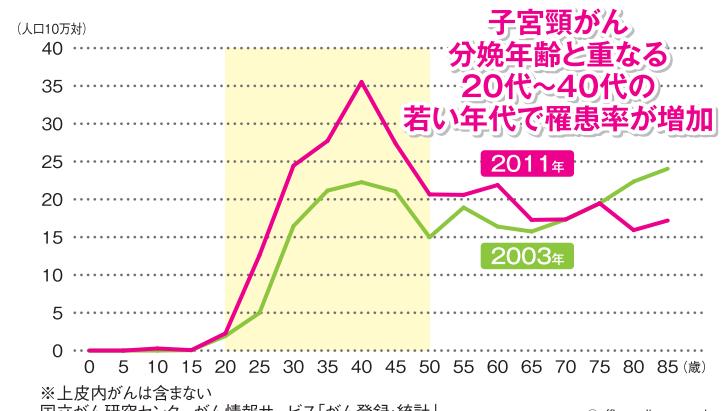
対馬 ルリ子先生

産婦人科医師／医学博士
1984年弘前大学医学部卒業、東京大学医学部産婦人科、都立墨東病院周産期センター医長を経て2002年ウインズ・ウェルネス銀座クリニック(現 対馬ルリ子女性ライフクリニック銀座)を開業。以来、女性のための総合医療(女性用ドックや検診、健康医療相談、産婦人科、乳腺科、内科、泌尿器科、皮膚科などのヘルスケアチームによる医療)を実践している。2003年に女性の心と体、社会とのかかわりを総合的にとらえ女性の生涯健康を支援するNPO法人女性医療ネットワークを設立、全国約500名の女性医療者とともに、さまざまな情報発信、啓発活動、政策提言等を行っている。

子宮がんには、「子宮頸がん」と「子宮体がん」があるのをご存じでしょうか。2つのがんはまったく別の病気です。できるだけがんは50代～60代にピークがあります。子宮頸がんは、HPV(ヒトパピローマウイルス)感染が原因で発生するもので若い女性がもつともリスクが高いです。子宮頸がんの罹患のピークは20代～40代。子宮体がんは50代～60代にピークがあります。子宮頸がんは、HPV(ヒトパピローマウイルス)感染が原因で発生するもので若い女性がもつともリスクが高いです。

子宮のがんは2種類
罹患のピークも原因も別々

子宮頸がんの年齢階級別がん罹患率の推移(2003年、2011年)



子宮頸がんの原因は、先述のとおりHPV感染です。子宮頸がんとHPVの関連は99%以上なので、まずはウイルス感染しなければがんにはなりません。ウイルス感染は、性交経験が一度でもある女性であれば、誰もが感染の可能性があります。PVIに感染します。感染した女性にはもちろん自覚症状はありません。8～9割は自然免疫力でウイルスが排除されますが、ウイルスが消失しますが、2割弱の女性は、子宮頸部(壁の奥の子宮の入り口部)に感染したウイルスが残ってしまいます。これが、子宮頸部の変化しやすい細胞

ウイルス併用検診であれば見落としをかなり防げる

一方、子宮体がんは女性ホルモン異常を背景として発症するため、月経不順の女性や更年期世代にがんのリスクが高くなっています。今回は、子宮頸がんについてお話しします。

子宮頸がんは今、出産年齢と重なる20代～40代の若い年代に増加しており、別名「マザーキラー」と呼ばれています。頸がんは、1980年代にその原因が究明されました。今は、さまざまな情報発信、啓発活動、政策提言等を行っている。